

自治体史収集資料の整理と活用 —新修茨木市史収集資料を事例に—

高橋 伸拓*

要 旨

本稿は、自治体史編纂終了後の、自治体史収集史料の整理と活用について、新修茨木市史収集資料を事例に検討するものである。まず、①旧『茨木市史』と『新修茨木市史』の概要、②新修茨木市史収集資料の性格と整理方法について確認して今後の課題を検討し、③新修茨木市史収集資料の活用方法の一案として、地域災害アーカイブズとしての活用について考察を行った。

キーワード

自治体史 収集資料 アーカイブズ 災害

1. はじめに

本稿は、自治体史編纂終了後の、自治体史収集史料の整理と活用について、新修茨木市史収集資料を事例に検討するものである。

自治体史の編纂については、近年までの自治体史編纂のまとめがなされ、今後の課題が検討されている^(註1)。多数ある課題の一つとして、自治体史編纂後の収集資料の整理・保存・活用があげられる。編纂後の収集資料は、①文書館が設立されて整理・公開される^(註2)、②博物館や図書館、役所内で保管される、といった動向がみられ^(註3)、新修茨木市史収集資料は②に位置付くものである。

筆者は、新修茨木市史の編纂に関わることはなかったが、平成29年(2017年)度から旧茨木市史編さん室(以下、編さん室とする)の収集資料が茨木市立文化財資料館(以下、文化財資料館とする)へ移管され、その整理を担当している。こうした事例は他の自治体でもあると思われるが、本稿は、このような状況の中でいかに資料の整理を進めてきたのかをまとめ、まだ作業途中ではあるものの、自治体史収集資料への対応の情報共有として記すものである。

自治体史収集資料の場合、古文書について多く論じられるが、新修茨木市史収集資料は、古文書などの文献資料に加えて、考古・民俗・美術工芸・地理といった様々な分野の資料も引き継ぎ、その整理・活用を考える必要があり、

こうした資料の整理の一例を示してみる。

また、自治体史収集資料の活用は重要な課題である。本稿では、活用方法の一案として、地域災害アーカイブズとしての活用について提示する。日本では、阪神・淡路大震災や東日本大震災以後、災害への意識が高まり、歴史学においても災害史に関する成果が発表されている^(註4)。また、日本各地で被災した資料のレスキューに取り組まれ^(註5)、こうした動向は看過することができない。

以上を踏まえて、本稿では、まず①昭和44年(1969年)発行の『茨木市史』(以下、旧『茨木市史』とする)及び新たに編纂された『新修茨木市史』の概要と②新修茨木市史収集資料の性格と整理方法について確認して今後の課題を検討し、③新修茨木市史収集資料の活用方法について考察を行う。

2. 旧『茨木市史』『新修茨木市史』の概要

ここでは、旧『茨木市史』と『新修茨木市史』の内容を確認する。【表1】は旧『茨木市史』と『新修茨木市史』の構成をまとめたもので、旧『茨木市史』と『新修茨木市史』通史Ⅰ～Ⅲは章立てを示した。

『新修茨木市史』は、平成10年(1998年)に市制施行50周年記念事業として編纂が開始され、平成29年(2017年)までの間に通史3冊、史料編6冊、別編1冊、別冊1冊の

* 茨木市立文化財資料館

計 11 冊が刊行された。通史は、自然編・歴史編で構成され、史料編は古代中世、近世、近現代、考古、地理、美術工芸、別編は民俗、別冊は年表を収録し、文献以外の資料も取り上げ、旧『茨木市史』と比べて充実した内容となっている。国の重要文化財となっている東奈良遺跡の銅鐸鋳型は、旧『茨木市史』が刊行された後の昭和 48・49 年（1973・74 年）に発見され、『新修茨木市史』に記述されたことは、茨木市にとって意義深いといえる。

それでは以下、全ての内容について言及することは、筆者の力量不足により難しいため、筆者の専門である近世史に限ることとし、『第二巻通史Ⅱ』『第五巻史料編近世』についてその特徴と今後の課題について検討する。

近世専門委員の村田路人氏は、近世の通史記述で意識された点を次のように述べている。畿内近国地域はさまざまな領主の所領が入り組んだ非領国地域で、領主の違いを超えた広域的な支配を必要とし、これを幕府広域支配と呼ぶ。幕府広域支配は、かつての自治体史では取り上げられることはほとんどなかったが、新修茨木市史では特に 1 節を設けて説明しているとし^(註6)、この点が今回の特徴であるといえる。非領国地域は、薩摩藩島津氏が領有していた薩摩国・大隅国のような領国地域に比べて、江戸時代の地域の特徴や象徴を端的に説明することが難しい。しかし、様々な領主の支配をみることができるところをメリットとして考え、今回の市史の成果を踏まえて、各個別領主の支配の

特徴を今後も検討する必要がある。

茨木市域を一覧すると、まず町場として交通の拠点であった郡山宿、流通の拠点であった茨木村があったが、町場の様相を具体的に明らかにする必要がある。郡山宿は、本陣については古文書が伝存し、ある程度明らかになっているが、郡山宿が宿場町としてどのような様相であったか不明な点が多い。茨木村は、在郷町として知られ、多くの商人がいたことが確認されるが、商人の経営など実態は詳しく分かっていない。茨木村と郡山宿は、茨木市域の近世史を考える上でポイントになるため、今後追究すべき課題であろう。

次に、茨木市北部の山間部の史料調査が課題として残っている。南部の平野部に比べて北部の山間部の史料があまり集まっていない。これは、隠れキリシタンの里として知られる下音羽村と千提寺村の様相を検討できていないことにもつながる。下音羽・千提寺村を含んだ五ヶ庄と呼ばれた山間部の地域構造・村落構造などを検討する必要がある。茨木市域の山間部がどのような特徴を持った地域であるのかを検討することは、キリスト教がどのような地域に伝来し、信仰が続けられたのかという問題にもつながり、日本におけるキリスト教の展開を考える上でもポイントになるものと思われる。

以上、町場と山間部は、史料的制約によって多くの課題が残っており、今後、これらの点を意識して資料調査を行

【表 1】旧『旧茨木市史』・『新修茨木市史』の構成

旧『茨木市史』（1969 年）	『新修茨木市史 第一巻 通史Ⅰ』（2012 年）	『新修茨木市史 第二巻 通史Ⅱ』（2016 年）
本編	自然編	第一章 近世的秩序の形成
はじめに	第一章 基盤地質	第二章 地域社会の発展
第一章 原始古代の茨木	第二章 山地と平野の地形のしくみ	第三章 地域社会の諸相
第二章 律令時代の茨木	第三章 明治時代以降の森の変遷	『新修茨木市史 第三巻 通史Ⅲ』（2016 年）
第三章 中世の茨木	第四章 花粉分析から得られた完新世後期の植生変遷	第一章 明治維新と茨木
第四章 中世茨木の文化	第五章 気候	第二章 三島郡の成立と茨木
第五章 近世封建制の成立と展開	歴史編	第三章 近代社会の展開と茨木
第六章 近世産業の展開	第一章 茨木のあけぼの	第四章 アジア太平洋戦争と茨木
第七章 近世文化と庶民生活	第二章 弥生時代の茨木市域	第五章 戦後社会の発展と茨木
第八章 明治維新と茨木地方	第三章 古墳時代の茨木市域	
第九章 地方自治の成立と戦時体制	第四章 文献にみる律令制以前の三島	『新修茨木市史 第四巻 史料編 古代中世』（2003 年）
第一〇章 茨木市の成立	第五章 律令制の形成と展開	『新修茨木市史 第五巻 史料編 近世』（2009 年）
史料編	第六章 古代の信仰と社会	『新修茨木市史 第六巻 史料編 近現代』（2011 年）
	第七章 院政期の公領と私領	『新修茨木市史 第七巻 史料編 考古』（2014 年）
	第八章 鎌倉期の茨木の領主と住人	『新修茨木市史 第八巻 史料編 地理』（2004 年）
	第九章 内乱期の茨木	『新修茨木市史 第九巻 史料編 美術工芸』（2008 年）
	第一〇章 室町幕府・摂津守護細川体制下の茨木	『新修茨木市史 第十巻 別編 民俗』（2005 年）
	第十一章 中世末期の茨木	『新修茨木市史 別冊 年表・索引』（2017 年）

う必要がある。

『新修茨木市史』の編纂にあたっては、村明細帳、村誌、新聞を収録した史料集が多く刊行され、編纂の過程や研究成果を収録した年報も発行されていた^(註7)。村明細帳は未刊のものがあり、課題として残っている。また、膨大に集められた古文書の目録が刊行されていないため、整理・公開が大きな課題である。

3. 新修茨木市史収集資料の性格と整理方法

ここでは、新修茨木市史収集資料の性格と整理方法について確認する。

新修茨木市史収集資料は、古代史・中世史・近世史・近代史・現代史といった文献資料、美術工芸、地理、民俗、考古の各分野に関する資料で構成される。また、新修茨木市史収集資料の大半を占める古文書は、購入資料、寄贈資料、寄託資料、写真撮影資料に分類される。

これら膨大に集まった資料は、歴史資料管理システムとして、専用のソフトを用いて端末に登録している。このシステムは、各分野ごとの資料を目録化し、それぞれに撮影した画像を添付することで、資料の写真を閲覧できるようにしている。システムは編さん室で運用されていたものを引き継ぎ、資料等を引き継いだ2017年3月から4月初めに、システムの使用方法を確認し、資料の登録方法を各分野の通史・史料編を担当した職員と協議をして、全ての分野の資料が登録できるようにフォーマットを設定した。現在は、全ての資料をシステムに登録し、茨木市の文化財に関する情報を検索できるようにすることを目標に取り組んでいる。こうして、文献資料（古代・中世・近世・近代・現代史）だけではなく、考古、美術工芸、地理、民俗の資料などを、歴史資料管理システムに登録して管理している。

以上、新修茨木市史収集資料の性格と整理方法について確認したが、その他留意して作業を行っている点をまとめておく。

①調査概要のデータ化

編さん室が茨木市内を調査して記録した文化財に関する調査票が紙ベースで保管されている。資料の所在情報、また文化財に関する情報を蓄積して引き継いでいくため、このデータ化を行った。

②文書群概要目録の作成

各文書群は、一点ごとの目録が作成されているが、各文

書群の内容を100～200字程度に記したレファレンス用の文書群概要目録を作成した。情報としては、いつの年代のものがあり、主にはどのような内容のものが含まれているのかを記している。

③デジタルデータ・紙焼き資料の管理

古文書や絵図資料は、外部に業務委託して撮影され、膨大な量のデジタルデータと紙焼き資料が蓄積されている。デジタルデータは、DVDでの保管と、歴史資料管理システムへの登録で管理している。紙焼き資料は倉庫に平積みされていたが、これを書棚に配架して利用できるようにした。ただ、配架するだけではどの冊子にどういった文書が収録されているか分からないため、目録を印刷してこれも一緒に配架して検索できるようにした。

④マイクロフィルムの管理

マイクロフィルムは、温湿度管理をしておらず、巻き直して扇風機で風を当てて酸化・劣化防止に取り組んでいる。マイクロフィルムのリーダーはないため、マイクロの閲覧はできないが、保管用としている。

上記の4点は、筆者が以前所属していた、千葉県文書館での経験等を参考にして行っているものであり、特に目新しい取り組みではない。しかし、上記の①・③・④は、自治体史編纂の終了後、倉庫などで死蔵して散逸・劣化する可能性が高いものであり、意識して管理し、活用を考える必要がある。

新修茨木市史編纂後の最大の課題は、収集資料の整理と公開である。資料の公開にあたっては、膨大にある資料（主に古文書）と目録を突き合わせて見直しを行う必要があるが、地道に作業を進めつつ、いかに利用の便を図るかも合わせて考えなければならない。

4. 新修茨木市史収集資料の活用

ここでは、以上みてきた新修茨木市史収集資料の活用について考察する。

まず、文化財資料館での展示や古文書教室、研究での活用などが考えられるが、より社会に役立てる方法として、ここでは地域災害アーカイブズとしての活用について考えてみたい。ここでいう地域災害アーカイブズとは、地域で起こった災害に関する記録資料を指す。膨大にある新修茨木市史収集資料の中から、災害に関するアーカイブズをまとめるという試みである。本稿ではひとまず、地域災害アー

カイズとして①洪水、②土砂災害、③溜池について順番に考察する。

①洪水は、茨木市の災害として一番に想起されるものと思われる。茨木市内の河川としては、安威川、茨木川、勝尾寺川、佐保川があり、河川関係の史料が多数伝存している。洪水の被害は、多くの古文書や絵図資料で、また近代以降の写真で確認できる。例えば、別稿で記した文化元年の茨木川・安威川の付替計画に関する史料をみると、島村等の村々が洪水で生活が困難になっている様子が見え（註8）。洪水関係の資料は、どの河川でどのような災害が起きたのかという情報を記録した古文書や絵図資料を河川ごとに分類してまとめる。

②土砂災害は、江戸時代の土砂留制度に関する史料が残っている（註9）。江戸時代の茨木市域は、土砂留奉行である高槻藩の管轄地域であった。高槻藩の役人が島下郡内を巡回して危険な場所の普請を指示している。例として、宿久庄村をみると、村内の佐保川・勝尾寺川沿いで「山崩」「山元」「川岸崩」、すなわち山の崩落やはげ山、川岸の崩落となっている箇所が計11か所あったことが確認できる。災害の発生した、もしくは発生する可能性のあったウィークポイントの箇所であったといえる。細かくみると、「山崩」2か所、「山元」8か所、「川岸崩」1か所である（註10）。こうした普請所帳で土砂災害の情報を確認できる。

③溜池は、市内で多くみられ、災害という点からはあまり注目されていないが、堤が切れると洪水が起きるため、

溜池からの悪水(排水)による被害を記した史料が多数残っている。茨木市内では、最大の溜池である松沢池は検討されてきたが（註11）、その他の溜池についてはほとんど検討できておらず、今後意識して検討していく必要がある。

以上、①洪水、②土砂災害、③溜池に関する資料についてみてきた。地域の災害史に関する取り組みはすでに各地で行われているものと思われるが、これら地域災害アーカイブズの内容を検討し、人々がどのように災害と向き合ったかを知ること、地域における災害の認識や防災意識につなげることができないかと考えている。

5. おわりに

日本では、文書館の建設が徐々に進められているが、自治体史編纂から文書館へという事例はまだわずかであり、大半の自治体史収集資料は博物館や図書館、役所の中に保管されているのが現状ではないだろうか。

自治体史収集資料を死蔵することなく、いかに活用するかを考えていく必要がある。今回、筆者は新修茨木市史の編纂に関わることなく、新修茨木市史収集資料の性格を把握し、整理し、活用するという大きな課題に取り組むことになったが、これを機会として捉え、他の自治体でも意識してもらえるような自治体史収集資料の活用方法についてモデルケースとして示していければと思う。

平成29年(2017年)度に収集資料を引き継いだばかりで、まだ課題は山積しており、一つずつ取り組んでいきたい。

【註】

- 1) 最近、『日本歴史』836号(2018年1月)で新年特集として「自治体史を使いこなす」が生まれ、様々な分野から自治体史に関する意見が出され、自治体史について関心が払われている。また、関東近世史研究会が自治体史編纂の企画を特集し、自治体史編纂の課題を提示している(企画例会「関東近世史研究と自治体史編纂」『関東近世史研究』68・69・71・75・77・79号、2010年7月・2010年10月・2012年2月・2014年5月・2015年8月・2016年12月)。
- 2) 高野修『地域文書館論』(岩田書院、1995年)、高橋実『文書館運動の周辺』(岩田書院、1996年)、同『自治体史編纂と史料保存』(岩田書院、1997年)、小松芳郎『市史編纂から文書館へ』(岩田書院、2000年)、文書館問題研究会・横浜開港資料館編『歴史資料の保存と公開』(岩田書院、2003年)等。
- 3) 草薙由美「博物館における文書の保存と活用―相模原市立博物館の事例―」(文書館問題研究会・横浜開港資料館編『歴史資料の保存と公開』岩田書院、2003年、第3部第3章所収)。
- 4) 北原糸子編『日本災害史』(吉川弘文館、2006年)、渡辺尚志『日本人は災害からどう復興したか』(社団法人農山漁村文化協会、2013年)、磯田道史『天災から日本史を読みなおす―先人に学ぶ防災』(中央公論新社、2014年)、

倉地克直『江戸の災害史』（中央公論新社、2016年）等がある。

- 5) 奥村弘『大震災と歴史資料保存—阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』（吉川弘文館、2012年）、奥村弘「被災歴史資料と災害資料の保存から歴史研究へ—地域の過去と未来をつなぐために」（『歴史学研究』924号、2014年10月）等。
- 6) 『新修茨木市史』全巻発刊記念シンポジウム「いばらきの過去・今・未来—市史編さんからみえてきたもの—」配布資料（2017年1月）による。
- 7) 平成29年度3月末までに、新修茨木市史史料集として以下のものが刊行された。『史料集3 鮎川村庄屋日記一（享保11年正月～同14年12月）』（2001年）、『史料集4 鮎川村庄屋日記二（享保15年正月～同18年2月）』（2001年）、『史料集9 鮎川村庄屋日記三（享保18年2月～元文元年12月）』（2005年）、『史料集11 鮎川村庄屋日記四（元文2年正月～同3年9月）』（2007年）、『史料集14 村明細帳』（2010年）、『史料集1 村誌—茨木市域—』（2000年）、『史料集2・15・18 村誌Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ—茨木市域—』（2001・2011・2014年）、『史料集5 茨木市域小字名索引』（2002年）、『史料集6 茨木市関係地理学文献目録・解題』（2003年）、『史料集7 新聞にみる茨木の近代Ⅰ—三島地域新聞記事集成—（明治12年～明治22年）』（2004年）、『史料集10 新聞にみる茨木の近代Ⅱ（明治23年～32年）』（2006年）、『史料集13 新聞にみる茨木の近代Ⅲ（明治33年～大正元年）』（2009年）、『史料集16 新聞にみる茨木の近代Ⅳ（大正2年～昭和元年）』（2012年）、『史料集19 新聞にみる茨木の近代Ⅴ（昭和2年～昭和20年）』（2014年）、『史料集17 図説地理近現代の茨木』（2013年）、『史料集8 将軍山古墳群Ⅰ』（2005年）、『史料集12 将軍山古墳群Ⅱ』（2008年）、『史料集20 鮎川村戸長執務手控え』（2016年）。『新修茨木市史年報』は15号まで発行された。
- 8) 高橋伸拓「文化元年の茨木川・安威川の付替計画」（『茨木市立文化財資料館 館報』3号、2018年3月掲載予定）。
- 9) 土砂留制度の研究として、水本邦彦「土砂留役人と農民—淀川・大和川流域における—」（同著『近世の村社会と国家』東京大学出版会、1987年、第三部第一章所収、初出は1981年）、同「近世の奉行と領主—畿内・近国土砂留制度における—」（同著『近世の郷村自治と行政』（東京大学出版会、1993年、第Ⅲ部第8章所収）、水本邦彦『草山の語る近世』（山川出版社、2003年）等がある。
- 10) 享和3年「土砂留場御普請所帳」（鳥羽区有文書、『新修茨木市史第五卷史料編近世』、2009年収録）。粟生村でも同様の普請所帳が同じ年に作成されている（享和3年「土砂留場御普請所帳」（『箕面市史史料編六』、1975年収録）。
- 11) 『茨木市史』（1969年）、『新修茨木市史第二卷通史Ⅱ』（2016年）、高橋伸拓「近世後期摂津国における溜池の造成—島下郡松沢池を中心に—」（『茨木市立文化財資料館 館報』1号、2016年3月）、同「近世後期摂津国における溜池の運営と利用—島下郡松沢池を事例に—」（『同上』2号、2017年3月）。